

献呈の辞

法学部長 小川 健

柴田平三郎先生は、二〇一六年三月をもって本学を定年退職なさいました。私どもは先生のご退職に際し、長年にわたる本学へのご貢献に対して、名誉教授の称号をお贈りし、またここに本紀要の特別号を捧げることで、感謝の気持ちを表したいと存じます。

柴田先生は、一九八二年四月に本学法学部法律学科に助教授として着任され、一九八六年四月に教授に昇任されました。

先生は、わが国では以前あまり研究がなされていなかった中世の政治思想が、近現代の政治思想に大きな影響を残していることに若くして着目し、中世政治思想研究の分野を切り開いてこられました。「アウグスティヌスの政治思想『神国論』研究序説」（未來社 一九八五年）で、一九八六年に母校である慶應義塾大学から博士号の学位を受けたことを皮切りに、「中世の春―ソールズベリーのジョンの思想世界」（慶應義塾大学出版会 二〇〇二年）、「トマス・アキ

ナスの政治思想」(岩波書店 二〇一四年)と、その研究を広げかつ深め、またこれに関連してモーゼス・フィンリーヤトマス・アクイナスの翻訳等も手かけて、わが国の中世政治思想史研究の基礎を築いたといっても過言ではないでしょう。

このような、学問分野へのご貢献やこれを通じた本学及び本学部の評価への寄与に加え、学内においては、学友会総務部長、国際関係法学科長、法学部長、図書館長、エクステンションセンター長など多くの役職を歴任される間、相互に「平ちゃん」「彰ちゃん」と呼び合う朋友でいらつしやる古関彰一本学名譽教授と共に、現在の学内及び学部内の自由な風通しの良い雰囲気を作り出してこられました。

また、教育者としても、本号に寄稿してくださった千葉大学大学院社会科学研究院教授の関谷昇先生をはじめ様々な分野で活躍する多くの人材を育成し、その講義も聴講している女子学生を夢見心地にさせたというエピソードが残るような大変魅力的なものでした。

本号の執筆依頼に際して、編集者が調整に追われる程多くの方の執筆のご希望をいただいたことも、また、先生のご人徳の故と存じます。

先生には今後ともご健康に留意され、ますますご活躍なされますよう、本号

執筆者及び同僚一同心より祈念し、謹んで本号を献呈申し上げます。

二〇一七年四月